




<オンラインコースの手法と戦略>
eラーニングの導入と評価



青山学院大学 国際政治経済学研究所
 松田 岳士
 MATSUDA, Takeshi




発表項目

- 高等教育eラーニングの3大障害
- 克服法1 導入時の意識
- 克服法2 組織作り
- 克服法3 評価
- 事例紹介: AML, A²EN
- まとめ






なぜ、私の組織では導入できないのか

- 興味を示す同僚が少ない
- そもそもトップが理解していない
- とてつもない作業量を受け入れる仕組みがない



新しいメディアや教授法導入の際には必ず起こる論議
 北米事例に詳しくなってもあまり意味がない




eラーニングを阻む障害

1. 導入時: 「3ない運動」
人ない、金ない、時間ない
2. 実施時: 「サンタクロース待望」
責任の所在が不明
3. 学習者: 「夏休みの宿題」現象
期待したほど学ばない




3ない運動

- 本当に「できない理由」なのか...
コンソーシアムに入ることもできる
インフラはただで使えばいい
安い労働力を確保する方法もある
- 極言すれば、本当に必要なのは組織としてのGoサインだけ
- ただしコアメンバの意識の統一がないと続かない




無責任なeラーニング

- eラーニングは「サンタクロース」ではない
学生「見たことがないけれど
本当にいるのかなあ」
教員「プレゼントを置いておけば、
義務は果たした」
企業「とにかくシーズンオフになる前に
売り切ってしまうおう」






夏休みの宿題現象

- 提供者: リソースを十分与えているのだから、「いつでも、どこでも」学習できるはず
- 学習者: 特に今学ぶ必要はないので「いつか、どこかで」学習すればよい



ネットワーク上にマルチメディア教材を配置したからといって、モチベーションに溢れた学習者が突然増えるわけではない




障害の克服

1. 導入時: 「3ない運動」
共通認識を持ち、キーパーソンを正攻法で説得しよう
2. 実施時: 「サンタクロース待望」
責任が見える組織を作ろう
3. 学習者: 「夏休みの宿題」現象
学習者を知り、メンタリングを工夫しよう




定義と意義

eラーニングとは、情報技術によるコミュニケーションネットワークなどを使った**主体的な学習**である。

コンテンツが学習目的に従い変種されている
 インタラクティブ性が提供されている

『eラーニング自費2002/2003』, 210

様々なメリット(時間・空間からの解放、双方向のコミュニケーション...)の一方で、成功のためにはパラダイムシフトが必要

なぜeラーニングか

- 高等教育にとっては
 - 学習、教育環境変化
 - 18歳人口減少
 - 規制緩和
 - IT技術、通信の発達
- 改革を迫られる大学教育
 - 「eラーニングを教育改革のトリガーに」



企業からの要請

- 企業が必要とする人材が不足
 1. 想像力、構想力
 2. ビジネスモデリング力
 - ...
 6. コミュニケーション能力
- 知識から知恵へ
- eラーニングがビジネスシステムへ融合



何を利点として強調？

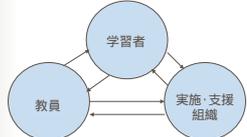
- 実は何でも可能と言えるが、全てのメリットを強調すると真実味がない
(例: どこでも、誰でも、いつでも、安く?)
- eラーニングをどのように使いたいのか、実務にあたるグループの中で意識統一してキーパーソンを説得
何をあきらめるか
(理念はともかくとして) 実務では欲張らない

障害の克服

1. 導入時: 「3ない運動」
共通認識を持ち、キーパーソンを正攻法で説得しよう
2. 実施時: 「サンタクロース待望」
責任が見える組織を作ろう
3. 学習者: 「夏休みの宿題」現象
学習者を知り、メンタリングを工夫しよう

組織作りの前に 1

- 必ずどこかに問題が発生する(プレーヤー自体/関係)



Philips, V (2002) "Why Does Corporate e-Learning Fail?" The Virtual University Gazette, June
乗り越えるための手立てが用意されているか？

組織作りの前に 2

- eラーニングで何をを目指すのか？
eラーニングの効果とは何か
誰のためのeラーニングか
- eラーニングが「当たり前」になったら、何で勝負するのか？
良質なコンテンツとは
ブランド力強化

組織作りの前に 3

- ブランド力 eラーニングのポジション



Source: Barrett B. (2003) Handout of Special Lecture at TIT

知的財産

- 著作権の法体系と権利の管理
教育現場での例外措置(35条)
現在のIT環境から遅れ
< 来年1月より改定される >
- eラーニングプロジェクトの知的財産運用
AMLにおけるガイドライン
非営利である教育機関の制限



導入時の考慮

人文、社会科学系のeラーニングは
テク/ロジエ主導ではない

- 押し付ける必要はない
「新聞の勧誘」にならないように
- eラーニングには多くの形式、方法がある
WBT=eラーニングではない
ハイブリッド形(ブレンディッドラーニング)
- eラーニングが適していない分野もある

運営体制

- プロジェクト組織
関連事業者(コンテンツベンダ、システムベンダ、サービスベンダ、関連サービス)
 - コース開発・運営体制
eラーニング実施に伴う新たな人材(SME、インストラクショナルデザイナー、システム管理者、チューター…)
- これらの人材の位置付けと資格は？

記録を残し、共有

- Knowledge Sharingを教育組織にも導入
- eラーニングでは膨大なデジタルデータが発生する(学習ログ、質疑応答、教育コンテンツ、アンケート結果など)
上手にシェアすることで無駄を省いたり、新たなアイデアが生まれる
- 大学教員に「分担」の発想が定着する

人材の確保

- 専門家(企業)に丸投げ vs
全部自前でまかなう
どちらも現実的には難しい
- そこで
学生(学部生、大学院生)を上手に**参加**させる
「参画」と「参画」を峻別する重要性

人材の維持

- 企業も学生アルバイトもボランティアではない モチベーション維持に工夫
1. 研究のフィールドを兼ねるタイプ
論文が書けるように**参画**
 2. 単純アルバイトタイプ
手取り給与に満足感をもたらず
 3. 将来の職業でのプラスを目指すタイプ
クリエイティブな**技術**を取得させる

障害の克服

1. 導入時:「3ない運動」
共通認識を持ち、キーパーソンを正攻法で説得しよう
2. 実施時:「サンタクロース待望」
責任が見える組織を作ろう
3. 学習者:「夏休みの宿題」現象
学習者を知り、メンタリングを工夫しよう

学習者 = 消費者？

- eラーニングにおける学習者の性格
1. 伝統的な学習者
 2. 消費者
 3. 個人
- どのような割合で主張しているのか？
- 満足度の傲慢
満足度と学習効果は関係ない
- 

協調学習

協調学習が必要な理由

1. 学習効果

Learning Method	% Learned
Teach Others	90%
Discussion Groups	50%
Audio Visual	20%
Lecture	5%

Source: Accenture Web Site

2. モチベーション維持

Social Presence, 「飽きない」状況作り

評価の方向

- 学生を評価(成績)
* 各教員独自の視点、基準
* IDとテスト理論を用いて計画的に学生の成績を予測する教員
* アセスメントの重視
* タムペーバを恣意的に採点してOK
- 授業を評価
* アンケート、授業観察、インタビュー
* 学生の成績
* ログデータ(統一アンケート有)
* 教員の信念との比較

学習効果評価

- 学習効果評価の重要性
1. コンピュータメディア
 2. 学習者に主導権
 3. 授業設計が必要
- 何をどのように評価するのか
教育機関ごとに異なる
 - フィードバックは？
- 

授業評価の実際: 6段階

1. 従来授業の見直し : コンセプト作成
2. ニーズ分析 : 授業(コンテンツ含)デザイン
3. 形式的評価 : 開発、パイロット授業、修正
4. 効率の評価 : 授業実施
5. 効果の評価 : 実施後の評価
6. 持続的評価 : 2年目以降の評価

(Reeves 1992, Reeves & Laffey 1999)

評価チーム

- WG横断的評価チーム
助手、大学院生中心、一部学部生も
- 教員同士は評価をしない
北米式Peer Evaluationはなじまない
- フィードバック
各WGのミーティングで行う
- 評価に関する全AML的研究会

AML、A²EN評価の例

これまでの評価研究の例

- 同一コンテンツを使用し、異なる教授法を用いている授業の比較
- ブレンディッドの手法を用いた授業の満足度、自己効力感、テスト得点のモデル
- 国際遠隔授業における効果的なモデレーティング手法の探求

フィードバック事例 1

- 例1 諸データを分析した結果、授業Aでは学生のドロップアウトは低く、テストの平均点が高かったものの、満足度と成績に相関はなく、その原因は「浮きこぼれ」にあった
教員は満足度も高めて欲しいと判断
教授内容のレベルアップと協調学習の導入で対応中

フィードバック事例 2

- 例2 国際遠隔授業でBBSを用いた協調学習を行ったところ、発言数と成果物の評価の間には逆U字型の相関がみられた
教員は活発に発言する学生の成績が上がることを希望
メンタリング手法の開発中

メンタリング

- メンタ: ヘルプデスクでもチュータでもない
適度に激励したり、質問に正確に答えていけばよいと思っているとうまいかない
- 1. コース範囲の定義
- 2. コース内容の説明
- 3. 学習効果の評価
- 4. 学習者の進捗管理 などの活動

AMLの発展

- AENへの積極的対応
A²EN Project: 昨年度フィリピンと実験
今年度: IDer, WG3日本代表
- 独立大学院構想
- 品質保証と成果保証
評価との関連高く、現在の懸案事項

Thank you for listening.

Please contact
d6501002@cc.aoyama.ac.jp

